

平成三十年八月吉日初版作成

自他一体の心、  
愛を深める

(一部改訂)

高嶋 善三郎

## 目次

- 宇宙に漏満する生命・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 肉体人間の基の姿・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 地球人間の誕生・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 古い靈魂と新しい靈魂・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 肉体の親子と靈魂の親子・・・・・・・・・・・・ 6
- 輪廻転生の世界と神の世界・・・・・・・・・・・・ 6
- 自他一体の心、愛を深める・・・・・・・・・・・・ 7
- 地上界に神界の愛を現わす・・・・・・・・・・・・ 9
- 業想念を純化する生命の根源の光・・・・・・・・ 11  
(付記)
- 靈界からのメッセージ・・・・・・・・・・・・ 12
- 我即神也に行き着くまで様々なる輪廻転生を繰り返す・・ 13

### お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) [zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 宇宙に遍満する生命

ある法友から、「神は生命のことをいっているのですか」という質問がありました。この質問に対して、五井先生のお言葉(『続宗教問答』問90)から整理してみましよう。

まず私たち神人が我即神也と唱えていることの根拠というべき箇所です、人間と神との関係について、生命という両者に共通する概念を使って解説されています。

神様を一口にいえば、生命そのものであり、生命の基というところがまゝ。この生命は、限り無い智慧、限り無い力、限り無い創造力をもっている。そして人間が小生命であるのに比べて大生命とも呼ばれている。大宇宙の在りとしらぬものは、この大生命の心のひびきによって存在しているのだから、この大生命の心のひびきの外にぬるということも無い。そして神様のことを絶対者ともいっているのである。

絶対者はその働きの中に陰陽、プラスとマイナスをもっていて、その陰陽の働きによってもものを生みだしてゆく。絶対者が陰陽に分かれて、限り無い存在者、存在物となり、絶対者自身の相(すがた)を、その存

在者、存在物の中から仰ぎみるというようになってくる。

そこで、分生命(わけいのち)のほうの人間は自分の内部に神を存在せしめているので、内部の神が、外部の神々と交流しあっていることになる。この内部の一番奥の神の姿を、直霊といい、その別れとして存在しているのを分霊といい、直霊、分霊の働きを本心の働きという。そして、この直霊分霊の働きを真直ぐになさしめるために、外面的に働いているのが守護神なのであり守護霊なのである。

このような説明が実感としてわかるようになるのは、神様は一つであって多(人間)であり、多がすべて一なる神の生命を真直ぐに現わすことが出来るようになって、はじめて分かっていると言われています。

次に、神というと、私たち人間と遠い存在のように感じている人もいますが、五井先生は、神はいつも私たちの身の周りに存在するものとして説明されています。例えば庭に咲くバラ、その美しい可憐な姿は私たちに生命のひびきを現わし、伝えてくれています。また生まれたばかりの赤ん坊、生命をむき出しにして、私たちに豊かな、そして無邪気なひびきを伝えてくれています。これらのひびきの根源が神様であると言われるています。それは、神は大光明であり、その現わはひびきなのであると

いう説明の仕方です。その行(くだり)が次の箇所です。

言(ことば)は即ち神なりき」と聖書にあるように、言即ちひびきなのである。ひびき、いいかえれば、律動リズム、波動ということもできる。この世のすべては、神の心のひびきでできている。山川草木、虫魚鳥獣人類、その伸びゆく力、育成の力は、神のものなのである。私たちがこうしてものごとを考える力、私たちがこうして呼吸をしているのと、即ち人間の肉体を動かす原動力となっている力が神様である。

また、神様は、無限なる、大調和、大平和へ進化創造してゆく、宇宙の法則にそって働かれる存在で、神様という言葉や、神様という観念的な想念にひっかかって不自由になることは、極めて危険なことであると書かれている行が次の箇所です。

神様という言葉や、神様という観念的な想念にひっかかって、かえって自分の生命の働きを不自由にしてみましたりする場合があるので気を付けなければならない。また、自分の力以上の出来事に出会ったり、ちょっと奇跡的なことをみせられると、すくなくも大神様が直接働きかけているように思ったりする人が、宗教をやっている人たちにはかなり多いが、大神様はすべての力の原動力ではあるが、それは法則として働いて

おられるので、その法則に外れた生活をしている人々は、直接的にはどうしても大神様を感じ得ない場合があったり、法則に外れただけのゆがんだ神様の姿、いわゆる業想念の姿が神様そのもののような顔をして、その人の前に現われる。そうした消えてゆく姿的の神様をかついでいるのが邪宗教といわれている宗教なのであると言われています。

神様はやはり各人の生命の本源であり、絶対者であり法則であって、守護の神霊としては、個人人類の天命を生命の力を素直に自由にのびのびと働かせるため、生命の法則に乗せてくださる力であると解説されています。

### 肉体人間の基の姿

分霊としての生い立ち、意識は、どういふものなのでしょう。

『宗教問答』(問66)肉体人間の誕生や前生について種々と説がありますが、先生のお説はどのようなものかお聞きしたいと思います。(から人間の誕生時の意識、肉体界においてきてどのような意識になったのか等を整理してみましょう。

●霊とは、あくまで神そのものの別名であり、大霊あるいは宇宙霊といえは大神様のことで、直霊と云えば、人間の根源の光であり、分霊と云えば、肉体人間の基の姿という。これらの霊には迷いもなければ把われもない、自由自在の体であり、心である。

●人間としての発端は、宇宙神大霊が、各種の光を放ち（分かち）そのうち、人類そのものとして働く光の根源を七つの光（生命）にした。これが直霊であり、人間は誰れ一人として、この直霊の分霊ではないものはない。そこに、人間神の子という真理の言葉がある。

●この直霊（神）から分かれたいくつの分霊が、またいくつかに分かれ、またまたいくつかに分かれて、霊界という世界ができた。

●この霊人たちが、大神様の他の分かれた光によって出来上がった宇宙の星と、人々に呼ばれている世界に、（分霊（光）に想念が加わって魂がうまれ、魂から魄がつくられ、）魂魄となって、物質体をまとうって生活することになり、ここにはじめて、地球の肉体人間と同じ要素を持つ人間がつくられた。そうした星々で種々な経験を積んだ分霊たちは、一方は再び直霊と合体し、守護神という役目になって、一方の分霊がまたいくつかに分霊になり、分霊魂魄となって、地球世界に誕生することを指導し、その地上生活を援助するようになった。

## 地球人間の誕生

●霊界に生活していた分霊たちは、お互いに光の交流を行い、七種類の光（性能）が、種々と混ぜ合わさり、その光の交流の瞬間に、多くの子孫的分霊に分かれてゆくのであるが、このうち二種類の光の直霊から分かれた分霊たちはそのまま霊界で働いているのであり、残りの五種類の分霊たちは、守護霊の援助によって、物質界に、靈魂魄として最初の地球人間として誕生していった。

●神道でいう言霊は、各神霊の光の働きを説いている。アオウエイ（アィウエオ）の母音は、五直霊（命）のこと。この言霊がはっきりこの肉体界に、そのままのひびきを現わせば、この地球界に神界が出現するのであるが、今のところ業想念（自我欲望）が邪魔していて、神々のみ心はそのまま現れていない。

## 古い靈魂と新しい靈魂

●人間の生まれ変わりには、二種類ある。一種類は、前生何の何某と

て生まれ更ったというように、前生の一人の因縁因果特徴というものをそのまま受けついできた単なる再生、また一種類は、種々な靈魂の因縁因果や特徴を少しずつ混ぜ合わせて、一人の人間として再生している混合靈魂の人間がある。二種類目の生まれ更りの一つとして、一人の靈魂が二人以上の人々に分かれて生まれ更ることもある。古い靈魂は、二種類あるいは三種類とも云える生まれ更りのいずれをも誰しも経験している。古い靈魂は直靈に近い分靈魂であり、生まれ更りの数も多く、あの世とこの世の画面にわたって経験の多い靈魂をいうのであり、神に対する認識経験の深い人々である。新しい靈魂とはこの反対であって、あの世とこの世の経験に乏しいために、自己の本体である神の認識が浅く、無神論者となっている。

### 肉体の親子と靈魂の親子

● 肉体の親子を靈魂的にみると、その分靈の靈系統が等しいという点にもあるが、それは分靈になった年代が等しいという点ではなく、靈魂、つまり幽体と肉体的要素が類似しているものたちが結び合うのである。したがって親が古い靈魂で、子供が新しい靈魂だということではない。か

えて親より子供の方が靈魂的には古い場合もかなりある。そこに親子に似合わぬ立派な子が育ったりする。肉体の親子は靈魂のみれば、兄弟姉妹の立場であって、靈魂としての親子ではなく、靈魂的な親ともいうべき、正守護靈や、祖父母的な立場にある守護神から、過去世からの縁によって、その分靈魂を委任されて育ててゆくのが、この世的な両親なのである。親にとっては子供は神様からの預かり者であり、子供にとっては両親はこの世における最大の恩人なのである。何故かということに世に生まれるということは靈魂の進化にとって重大なるプラスになるからである。近頃は子供たちのうちで頼みもしないのに両親は勝手に自分を生んだのだから、親などみる必要がないと云う人々があるそうだが、これはとんでもない考えで、自分が頼んで親に生んでもらっているのが真相なのである。

### 輪廻転生の世界と神の世界

● 輪廻とは三界（肉体界、幽界、靈界）の下層、ヨガの教えをいえば、肉体、アストラル界、メンタル界（の）、自己の想念行為によってつくった環境を輪のようには廻りつづけるとである。つまり自己の想念行為のま

また、生まれ更りして、肉体界と他界とを往ったり来たりして生活してゆくことである。この輪廻は、自己の想念行為の波に乗って廻りつづけるという法則が出来ており、いかなる環境が現れてきても、それはすべて自己の想念所業のわざである。

●輪廻転生の世界に人間が陥ったのは、人間が神（直霊）から分かれ、霊界、幽界、肉体界へ降りてきたとき、神（直霊）への想い（感謝）を疎んじた結果、直観力を失い、五感六感に感じるもののはかは、何もなというさかさまな考え方や自由自在な神霊である人間を、肉体や幽体という限定された器的、物質的なものと夢のような思い方をしてしまったことによる。

●この輪廻の法則を立ち切り、あるいは乗り越えるためには、自我欲望の想念をすべて神のみに返上してしまうこと、つまり神にすべてを全託してしまうことが、一番早道なのである。神の世界に想念が入っていない以上は、苦界ともいえる三界の輪廻転生は止まらない。いちはやく神の世界に飛び込むで、自由自在心をもちて光明世界に住することが一番である。この神の世界は神界や霊界の上位をさし、貧者病死のない世界なのである。

●これまで説いてきた誕生や前生や再生などということは、人間の本体

の世界でなく、あくまで業想念の世界のことであって、人間の本体では常に神の世界において、光明燦然たる光を放し続けている。この真理の面から一言にしていえば人間が自己の前生を云々したり、過去世の因縁や今生の幸不幸にひっかかったりして、一喜一憂しているのは、消え去ろうとしているもの、あるいは今現れて消え去ろうとしているものを把え、追いかけるようなものであって、あまり智慧のある話ではないのであると五井先生は言われているのです。

### 自他一体の心、愛を深める

分霊としての私たちは、この肉体界に降りて来て、様々な体験をしていることが分かります。この目的は、何でしょうか。五井先生のお言葉（『愛の心』116ページ）によると、人間は肉体界に住みながら、神霊の世界に住んでいるのであり、想念が神霊の世界のひびぎに通ずれば、神霊の世界にその人の生活の重点が置かれるのであり、その人は肉体界に存在しながら、神霊のひびぎである、高い深い叡智に導かれて生活できるがありますが、その体験をし、霊的進化を遂げるためと言えるのではないのでしょうか。そして霊的進化を遂げる要件としては、自他一

体の心、愛を深めることではないでしょうか。

五井先生のお言葉『続宗教問答』の問92「神様の中に入るということとは、現実逃避ではないかと人にいわれましたが、いかがなものでしょう。」の中にそれぞれのお言葉があります。

宇宙の法則に乗るとは、自分が神のみ心と一つになって生きていくことであり、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立っている状態といえる。何故ならば、神のみ心は、大調和であって、すべてを生かすことに、その目的があるからである。自己的生命を自由に生かしたい、のびのびと平安に生きてゆきたい、と思ふならば、まず自己の心を自由の根源であり、生命の根源である、神のみ心の中に入ねまわしてしまふことが必要である。

神のみ心の中に自己を入れ切るということとは、神のみ心と同じような心で生きていることである。神のみ心とは、まず、平和な心ということである。まず自分を自由と愛する側からうながせば、自他一体の心というところになる。別の言葉で言えば、愛というところになる。五井先生は言わねばならぬ。

そして、この自他一体の心、愛を深めるとは、どのようなのが、何故分霊たちにはそれができるのかを理解できる、五井先生のお言葉があります。『白光への道』71ページをみてみましょう。

神は大生命であり、大霊である。この大霊が、七つの霊に働きを分け、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊という。この七つの直霊が各自のいのちを働きたし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれていくが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそつした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍している。

例えば、紫の働きをもつ直霊から生みなされた、紫の特色をもつ分霊は輪廻転生を繰り返しながら進化向上の道をたどっていく。その過程においても、本来の特色である紫の本質的働きは変わらぬが、その特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの



要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく。

そうした神の働き、光の輝き、生命の働きを、人間各自は、自己のうちにもっているものであって、この生命の働きを、天命通り、天の使命通りに働かせ得る人、運用出来得る人を神の使徒といい、自己の運命を完成させた人といい、天命を完うした人、という。

以上を整理すると、自他一体の心、愛を深めていくことは、私たち分霊は、自分の特色の他の六つの直霊の要素の働きを内に秘めており、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていくことであり、それが霊的進化することであり、私たちの天命が完うする瞬間にたどり着くことになる、確信できぬものではないでしょうか。

## 地上界に神界の愛を現わす

自他一体化の心、愛を深めていくこと、このように私たちは変わっていく

くのでしょうか。

五井先生のお言葉（『宗教問答』問80 悟ると全く感情がなくなり、木石のごとくなるのではないかという人がいますが、悟りと感情について説明下さい）をもとに整理しますと次の通りになります。

自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍感じる得るがその感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得るようになる。別の言葉でいえば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得る人、つまり、その人の一挙手一投足が、神の子の本質である、愛と真の人となるといわれています。

究極つまり直霊と一体になると、『我即神也の宣言文』にあるように無限なる愛、叡智、歡喜、幸せ、感謝、生命、健康、光、エネルギー、パワー、成功、供給があらわれ出る状態なると言えます。

私は、直霊に合体された五井先生がご存命中の四十四年前（昭和四十九年）、聖ヶ丘道場の玄閣で、たまたま五井先生にお会いし、挨拶をさせていただいたことがあります。その時、自分が持っていた悲しみも、苦しみも一瞬に消えさり、心は喜びと感謝で満たされていました。

その時、自体一体の心、愛を極めることにはどうしていいのか、神を顕現した方に接するだけで、魂は浄められ、喜びと感謝に溢れることを知りました。

では、愛の心は、どのような姿で現れるのでしょうか。五井先生のお言葉『愛・平和・祈り』に「愛の心、それは、思いやりという心で現れる、寛容・赦しという心でも現れるという心です。

思いやりの心は、愛の心が細かい心遣いになって、相手の想いの波に同調しながら光を入れてゆへ、とらうとらう、こちらから相手の心の中に入れてゆへ。寛容の方は、相手の心の波、想いの波を、こちら側に受け入れて、自己の心の中で昇華させてしまいうことです。

この二つの心があれば、たいがいの方は、その人に好意を持ち、その人の愛の心を受け入れる。

ここから、この地上界には神界の愛という心がある、それが現れていないと言われているのです。その心で現れているのか。

愛は執着の想いを伴います、愛の心の流れが、把持の想いになり、愛は愛を止まってしまう、愛する心が苦しみとなり、愛

されるものが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が生まれよう。

これは、普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどが、業想念(因縁)と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足を愛と誤解しているからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛り、他の生命を自我欲望のために縛りつけてしまっているからである。

別な言葉で云えば、純粹なる愛(神)の行為が、直接その光のままに行為される時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適度に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにつとめることが情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情というこ

ころは、愛(神)の面と、業想念(執着)の面との、どちらにも動きがはたつ、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念の方向に流れていくことになる場合がある、その場合、この心で現れているのは、愛を伴った光を伴った

愛、また、愛をわたすの愛はないのは、自分が相手を愛さないから

だということを知り、その人は頭で知っているかもしれないが、心ではわからないからであると五井先生は言われているのです。

### 業想念を純化する生命の根源の光

ここで、あらためて自他一体の心である、愛について『宗教問答』問80「悟るとは全く感情がなくなるのですか。」から整理してみましよう。

愛とは、明るい把われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力である、光が分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となる。

愛は光そのものであるから、電流が電球を通さないと光を現わせないと同様に、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまつが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたしたときには、その感情は光となって、相

手を照らし、人類を輝かすのである。

神の愛を容易く現わすことができないのは、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたすことがなかなか難しいからと言えます。この課題を解決するには、感情の波を超えて、その感情を純化していくほどの、強力な生命の根源の光をこの肉体に降ろすことがなによりも必要であります。これを実現するために、大神様から世界平和の祈りのみ教えが降ろされたと言えます。

私たちは、『人間と眞実の生き方』や『我即神也』『人類即神也』などの宣言文、また『神示による祈りの言霊』や『果因説』などを通じ、この課題解決である、神我一体、そして人類救済の道を歩んできたのです。神我一体の道、人類救済の道は、2003年に始まった究極の光の1筋を降ろす行事を通し、2009年に富士聖地に四次元の大光明の共磁場を形成し、2010年に私たちの叡智のチャクラを開くことができ、そして2014年宇宙神と私たちの魂が直結することにより、大きく開かれたと言つことが出来ます。また2016年に大光明の共磁場を五次元に上昇することに成功し、神聖復活目覚めの印が降ろされたことにより、神我一体、そして人類救済の道がさらに飛躍的に拡大しました。

人は、自分の目で現実を客観的に見ているかと思っているが、実は自分の意識を通して現実を見ていて、その意識によっては、現実が現実以下に見えている場合もある。だが、神とつながるチャクラが開き、神のバイブレーションがあることが分かるようになると、感覚が微妙になり、風景も輝い美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられるようになる。昌美先生は言われていますが、私たち神人は、2010年に叡智のチャクラを開き、神のバイブレーションを感じ始めているのです。

そして宇宙究極のエネルギーは、人間を通過せず、今生に現われることは絶対にありえない。人間の肉体は、神に似せられてつくられし極めて高度なる組織体であるため、宇宙神そのものの至高のエネルギーを媒体におさめ、知覚し、肉体のヴァイブレーションと合体し、変形させ、それによって、全人類に対して神の無限なるすべてを表現し示してゆく存在であるという自覚を、私たちは得てきています。

自分の周りに渦巻く不安恐怖を、光に還元し、自他一体感、愛を深め

たとき、失っていた直観力を取り戻し、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立ち、感謝と喜びにあふれた我即神也の我になっている自分、すなわち、昌美先生の云われる「神の器」となった自分に気づくことでしょう。

(付記)

### 霊界からのメッセージ

五十年前に臨死体験をして以来、何度も霊界と肉体界間を行き来している、喜多良男氏の話(著書『死帰』)によると、霊界にいる分霊が、この肉体界に記憶を失くし、生れてきたのは、利他愛を深め、霊的成長するためである。霊界では、霊位の同じ霊人同志しか暮らすことが出来ないのです。お互いに利他愛を深め合えない。ぬるま湯の世界。この人間界には、自分達より、低い霊位の霊人も降りて来ているが、自分達よりはるかに霊位の高い霊人も降りて来ており、いろんな刺激的な体験でき、自他愛を深めることができるからだということです。

そのため、各自それぞれ自他愛を深めるための計画を立てて自分の両親を選んで生まれてきている。しかし、この人間界に生まれてきた霊人

たちは、自我欲に把われ、当初の計画を満たさせないまま、元住んでいた霊界から地獄界に落ちていく霊人が多くなってきていると、霊界の現状を報告しています。

霊的成長するためには、どのような心がけをすればよいかという点、次のように言われています。

一、人間は霊的には最低レベルの存在である。限りなく所有したいという物欲、際限のない性欲や食欲、他者を支配したいという権力欲を、霊的な視点で捉え直すことこそ、霊的成長の意味である。

二、自分の幸せや家族の幸福だけではなく、他人の幸福のために無償の愛を捧げることこそ、霊的成長の意味である。

三、「霊的眞実」を一人でも多くの人に伝え、「霊的眞理」の内容を自分だけのものにとどめず、できるだけ多くの人々に分け与えること。

四、人生の中で遭遇するさまざまな苦しみや困難こそが、実は霊的成長を促す、得難いチャンスであると捉えること。

様々な失敗から学び成長する処として人間界はつくられている。私たちは失敗を恐れず、人のためになると確信することを実行すべきである。

霊界の（指導）霊たちは、人間の心の中を見通し、心の動機と目的を見抜いて、心の重要さに応じて、霊界から援助や指導を働きかけている。

霊的視野を身につけることによって、霊的楽天主義が可能となり、それが身につくと、人間が陥りがちな杞憂やよけいな取り越し苦労、恐れや悩みから解放される。すべての出来事が自分の成長にとって欠かすことのできない善きもの、と受け止められるようになると、教えてくれます。

私たちがすべての物事について、原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスに愛を注ぎ、感謝を注ぐことが、「霊的成長」する上において、極めて重要な要件であることをあらためて知らされる話です。

### 我即神也に行き着くまで様々な輪廻転生を繰り返す

ある法友から、人の病気の快復を祈ることは、守護霊様の計らいに介入することになり、新しいカルマをつくることになるのでしょうか。また生活に困っている人に、物やサービスを提供することは、神の御心になうことなのでしょうかという質問がありました。この質問に答えるのに、ヒントになる霊美先生のお言葉があります。『次元上昇』（74ページ）をみてみましょう。

その人は、その業を消さない限り、自分を真に赦せないのがある。前進できないと思ひ込んでいる。今生をこのような状況のもとに自分を置くことによって次の生まれ変わりは光輝く自由自在の世界を夢見ている。その真理が解らず、生半可の愛や思いやり施し、哀れみによって、その場に置かれている人々を救うことを考え、物質を与えたり、食物を与えたりして、その場の悲惨さから助け出したとしても、本人の意思がそれで充たされたか否かは誰にも判らないのである。あくまでも本人が決める問題だからである。

神でさえも人間一人一人の自由と創造を尊重し、決して一線を越えての働きかけを控えている。その大御心に反して、中途半端な考えから、他人の自由と創造を奪って自己満足にひたっている人々の間違いを正したくなる。

人類一人一人はみな、どこに国に生まれようが、どんな状況にあらうが、どんな目的を掲げようがみな、一人一人の責任においてこの人生を創造している。人類はみな一人残らず究極の真理、我即神也に行き着くまで様々な輪廻転生を繰り返して生きていくのである。

このお言葉を参考にこの質問に対する回答を整理してみましよう。

人の病気の快復を祈ることや、生活に困っている人に物やサービスを提供することは、肉体を持っている人間にとって、その苦しみを取り除いてあげたいという気持ちは、有り難いものであり、お互いが思いやりをもって接することは、個人も人類にとっても、平和実現の基といえます。

一方、昌美先生のお言葉では、その祈りや、物やサービスの提供によって、病気が治り、生活の苦しみから解放されたとしても、我即神也（永遠の生命への覚醒）に行き着くまで人間の苦悩は形を変えつつも消え去ることはないと言われています。言い換えれば、永遠の生命への覚醒がなされると、人間は苦悩を消え去ることができ、健康を保ち、商売繁盛や家内安全などの現世利益は、必要に応じ必要な時に享受できるといわれているのです。

人の病気の快復を祈る時、御心にならうのであればと、一方的に結果を求めるのではなく、それらの人たちの天命が一日も早く完うされますようにと祈るのであれば、相手の守護霊は、許される範囲でいろいろな配慮してくださることでしょう。また生活に困っている人に物やサービスを提供することは、させていただくという謙虚な気持ちで行い、相手の人たちの天命が完うされることを祈りながらやるのであれば、お互いの自他一体の心が深まり、御心にならうことではないでしょうか。